

日病薬誌, 平成12年6月1日発行(毎月1回1日発行), 昭和47年1月27日第三種郵便物認可, VOL.36, NO.6 ISSN 1341-8815
CODEN: NBYZEB

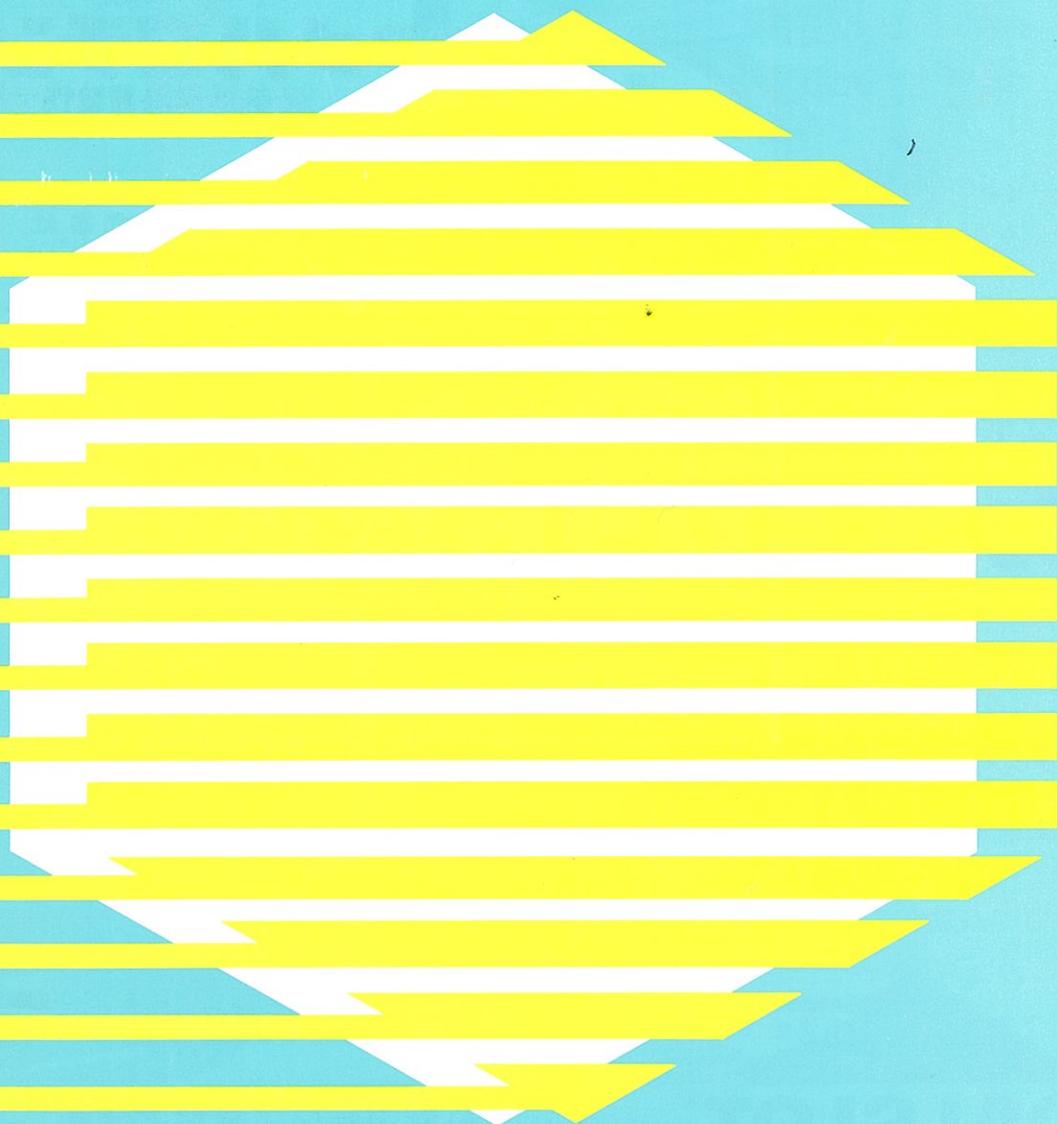
日本病院薬剤師会雑誌

JOURNAL OF JAPANESE SOCIETY OF HOSPITAL
PHARMACISTS

VOL.36 NO.6 2000



6



日本病院薬剤師会

川芎茶調散①処方解説, 臨床

北里大学研究所東洋医学総合研究所
漢方診療部医長 渡辺賢治

本日は川芎茶調散の第1回目である。川芎茶調散は頭痛の薬として知られているが、その処方解説をする。

原典

原典は『和剂局方』の傷寒門である。原文を読むと、「丈夫、婦人の諸風、上攻し頭目昏重、偏正頭疼し、鼻塞り、声重く、傷風壯熱、肢体煩疼し、肌肉蠕動し、膈熱し痰盛んにして、婦人の血風攻注し、太陽穴疼するを治す。ただし風氣に感ぜば悉く皆之を治す」とある。

これを意識すると、男性女性で風邪が上に上って、頭、目が重く、「偏正頭疼」とは片頭痛と正頭痛、片頭痛というのは頭の一部が痛むことを言う。それに対して頭全体が痛むのが正頭痛と言うが、偏正頭疼と言った場合、片頭痛と頭全体が痛む正頭痛の両方を含むという意味である。鼻はふさがり、声が沈んで、風邪に破られて熱が高く、体が痛み、体の筋肉がピクピクと動いて、「膈熱し」というのは横隔膜のあたりに熱があり、痰が盛んに出るものを治す。また女性で産後などに風邪が入り、太陽経のツボが痛むものを治すという意味である。

処方構成

処方の構成は、香附子 4g, 川芎 3g, 白芷, 羌活, 荊芥, 防風, 薄荷各 2g, 甘草, 細茶が 1.5g 入る。ただ原典では生薬の構成が現在のものとは異なり、香附子がなく、細辛が入っている。また原典では細茶を除いたものを粉末として、食後にお茶で服用するというように指示されている。現在はお茶も生薬の中に入れて、一緒に煎じて飲むという方法が一般に取られている。お茶にはカフェインが含まれており、中枢興奮作用により頭とか目をはっきりさせる作用が期待できる。またお茶に含まれるカテキン類は、最近、抗酸化作用があ

る、ということで非常に注目が集まっている。

使用目標

使用目標であるが、原文に従い風邪などの初期で頭痛を伴うものに用いる。また片頭痛などにも応用される。さらに更年期障害など、いわゆる血の道症に伴う頭痛などにも用いることがある。ただし大塚敬節先生は著作集の中で次のように述べている。「頭痛に用いる薬としては五苓散、半夏白朮天麻湯、川芎茶調散、呉茱萸湯などがある。川芎茶調散は頭痛の薬としては有名だが、私はこれを用いて効いたことがない」と述べている。敬節先生自身は川芎茶調散はあまり用いなかったようである。このことから片頭痛の患者さんでは川芎茶調散よりも呉茱萸湯、五苓散が選択されることが多いように思われる。また胃腸の虚弱な人では食欲不振、胃部の不快感、悪心、下痢などが現れることがあるので注意が必要である。

古典

古典で少し原文を補足してみる。長沢道寿の『医方口訣集』では、細茶（お茶）は頭目を清理、清らかにする作用があるということで、お茶の薬効としては頭とか目をすっきりさせるものであると書いてある。また浅井貞庵の『方象口訣』では、案ずるに太陽穴の痛みはすなわち両太陽（こめかみ）の痛みであると述べている。太陽のツボの痛みというのは、こめかみの痛みであるというのである。また有持桂里の『校正方輿輶』によると、「此の方、内因外因、及び偏正を論ぜず、一切の頭痛に用いて効験あり」と書いてあって、川芎茶調散が内因、外因、すなわち風邪によるものも、風邪によらないような片頭痛のようなものも含めて、また片頭痛（頭の一部が痛むもの）も、正頭痛（全体が痛むもの）も一切関係なく、すべての頭痛に用いて効果があると書いてある。

病院薬剤師のための漢方製剤の知識

症 例

症例であるが、私も片頭痛にこの処方を用いた経験はあまりないので、風邪に伴う頭痛に用いた経験を述べる。症例は30歳の男性で風邪を引きやすいとのことで来院された。身長176cm、体重80kgと体格はよいが、小児期に腸重責で手術をしたことがあり、風邪を引きやすく、頭痛を伴うとのことであった。葛根湯が効く時もあるが、効かない時もあるということで、今回は風邪に伴う頭痛を主訴に来院された。舌は湿っていて薄い白苔があり、腹力は中等度、胸脇苦満等の腹証ははっきりとした所見はなく、頭痛は頭全体が重く痛むということであった。

いわゆる拍動性の頭痛ではなかった。葛根湯の目標となるようなうなじの張りはなく、また少し汗をかくとのことから、葛根湯ではなく川芎茶調散を出した。患者さんはこれがたいそう気に入って、この時も3、4日の服用ですっかり風邪症状及び頭痛が取れたということで、それ以来、この患者さんに風邪には必ず川芎茶調散を出して毎回喜ばれている。このように風邪に伴う頭痛では効果が期待できる処方だと考えられる。

鑑 別

鑑別であるが、感冒などの頭痛に用いる時として、葛根湯や桂枝湯との鑑別が大事になる。葛根湯、桂枝湯は太陽病の頭痛であるが、太陽の病というのは頭項強痛と言って、頭痛とかうなじが張るといった症状がある。葛根湯の場合、首筋の張りが特徴で、風邪の初期でうなじがこる場合で頭

痛を伴うものに用いると効果がある。この場合大事なことは、汗をかかないということが大事な目標になる。それに対して桂枝湯は葛根湯よりも虚症の人の風邪によく用いるが、この場合、うっすら汗をかく、おのずから汗をかくというのが一つの目標になる。患者さんに聞いても汗をかくかかかないか分からないことがあるので、背筋に手を入れてみて、そこにうっすらと汗をかいている場合には葛根湯の症ではなく、桂枝湯の症だということが分かる。

また片頭痛に対しては、先ほど述べたように、敬節先生などは呉茱萸湯や五苓散を用いる機会が多く、川芎茶調散はあまり用いなかったようである。呉茱萸湯は手足の冷えを伴うような頭痛で、激しい嘔吐を伴うような煩躁を伴う片頭痛に用いることが多い。また五苓散は水逆の症、また水毒に伴う頭痛で、おしっここの出が悪いか、悪くないかということを確認して、おしっここの出が悪く、またのどが乾いて水をたくさん飲むような頭痛に用いられる。

また先ほど川芎茶調散が胃腸が弱い人には用いにくいと述べたが、胃腸が弱いような人の片頭痛もしくは常習性の頭痛に対しては、半夏白朮天麻湯という処方がある。半夏白朮天麻湯の場合、胃腸の症状と頭痛を伴うような患者さんで、時に胃内停水、心下部のところのポチャポチャとした音を腹診上認める。このようなものと鑑別しながら川芎茶調散を用いていただきたい。

(日本短波放送 2000年2月2日)